



不思議な薬

硯山人

ひかし〜ある田舎に一人の小人がありました。此小人はせいの小さい代りに耳が大きくて、まるで兎の様でした。それですから人の話し聲は遠くの方からもよく聞えるので中々耳さとして内所話などとはうっかり出来ませんでした。けれど此様に耳さといものですから、世間の様子は何かとよく聞えて夫れは〜大したもので村中の事は何んでもよく知り過ぎて居るので誠に困る位でした先づ朝起きると

小人「オヤ〜裏の左兵衛さんの處では今日おはぎをこしらへるつて、ツイツは御馳走だね。ナニ〜小人に知れるといけないつて。？ハ、ハ、ハ、ハ、モ一疾づくに聞えて居るに、……………」

オヤ、今度は隣りの太重さんの處で内所話をし

て居るな、なんて云つてるのだらう。一つ聞いて遣らうか？……………ナニ〜小人に内所だつてアレハおばあさんの聲だナウ、夫れから今日はおすしをこしらへ様かつて勝手に構しらへなさい、何も私に相談は入らない。なぜこら世間の人は私に内所〜つて云つて居るのだらう？。何も私が貰ひに行きはしまひし。」と小人は一人でぶつ〜云つて居ました。丁度其處へ近所の金棒曳とあだ名されて居るお喋り婆さんが来ました。此婆さんは毎日何も用がないものですから朝から晩迄村中の家を夫れから夫れへと歩き廻はつておしやべりをして遊んで居る人で方々の家の事を皆んな世間へ知らして歩いて仕方のない人でありました。夫れで何時も此小人の家へ来ては種々とおしやべりの種子を買出しては方々へ之を吹聴するのです。今日も亦何時もの通り何か面白いことはないかしらと思つて遣つて来たのです。

婆「ちびさん、今日は！」此おしやべり婆さんは何時も小人を呼ぶのにちびさんと云ふのです

婆「ちびさん、今日は！、大分お寒いね、お正月も一ぢきにおしまいだね、何か面白い事はないかね、」

と尋ねますと、
小「アハ、ハ、相變らず金棒曳の種子探かしかね、今日は何んにもないよ。あんまりお前が方々へ行つておしやべりするものだから人がみんな、嫌つて居るよ、ちとおしやべりをよしたらよからう」と云ふと

婆「何も私がうそを云やしまいし、い、ぢやーないか、おしやべり位したつて、御馳走して呉れと云ふのぢやなし、何もわるいことはあるまいぢやないか

小「ウ、御馳走つてば、今日は裏の李兵衛さんの處でおはぎが出きるし、お隣りの太重さん處ではおすしが出来るぞうだ。おばあさんはいぢがきたないから食べたいだらう。」
婆「何んだね、ちびさん、い、加減人を馬鹿にしよとばあさん、ブン／＼怒りながら行つてしまいました。そしてお隣の家の前を通つて村はづれ

の茶店の前に来ますと今しも村中の人が大勢集まつて休んで居ました。茶店のおばあさんは此おしやべり婆さんと懇意なものですから聲をかけて「お婆さんマア御休みなさいよ、お茶の入れ立てがありすから、何も御馳走はありませんが」と云ふとおしやべり婆さんは早速黙つては居ません直に金棒を曳き出しました。

婆「エ、エ、どうもありがたう、ナニもう御馳走なんかいらせんよ、今ニネ甘い／＼御馳走の出来る所をちやんと知つて居ますからね。先づ一つ二つ云ふて見れば小人の裏の李兵衛さんの處ではおはぎ出来るし、お隣りの太重さんの處ではおすしが出来るし、ナント御馳走ではないかね。」

と云ひましたので遂々此二軒の御馳走が村中に知れ渡つてしまいました。こんな風に村中の事は何も角も小人が聞き出してはおしやべり婆さんが云ひふらすので何處の家でもうつかり話することが出来ませんでした。しまひには村中の人は誰れも此二人を相手にする人がなくなつて何うかして此

村から二人を逐ひ出してしまふと云ふことになりましたが、扱て何うして逐ひ出さうかと頻りに工夫して居りましたが一向いゝ考へも浮びませんので今度は村の鎮守の神様に願申して見様と云ふことになつて先づ神主さんの處へ行つてお頼み申すと

神主「宜しい、それぢや私が神様にお願ひをして見やう」と云ふことになつて神主は装束を着て御幣を以て神様の御堂へ上つて

と祝文を讀むと神様は御堂の中から出て御出でになつて

神「コレ、神主願に依つて此村人等に都合のよいことを教へて遣はす」とお仰つた。神主は恐るゝ眼を開いて見ると、丈高く髯白く眞白な装束つけた老人の姿した神様が杖から小さい瓶を出して神主の前に置く所でした。神主は我知らず恐入つてハツと平伏すると神

様は

神「是は不思議の靈藥であるぞよ。是を彼のかしやべり婆さんに云ひ付けて小人の耳に一滴注がせよ。然らば小人の耳は見る間に小さくなりて今迄の様には聞えぬであらう」。

とかしやるかと思ふと神様は見えなくなつた。神主は有りがたき旨を幾度となく神前に御禮申して扱て其藥を持つて御堂から下りて来て村の人に此話をした、夫れではと云ふので先づ村の一人の人が其藥を持つておしやべり婆さんの處へと出掛けて行つて見ると丁度お婆さんはお晝の御飯を食べて居る所でした。

村人「おばあさん、今日は、おばあさんに、いゝもの上げませうか」と云ふと物好のおばあさんだから堪らない。

婆「ナニ、いゝもの？いゝものつて何と」と云ひながら食べ掛けて居たお飯を止めて出て來ました。

村人「おばあさん面白いのつて、是さ、是はね神様から戴いた不思議な藥でね、之を付けると大

きなものなんでも小さくなるのだよ、面白いだらう？ 小人の耳などは直ぐに小さくなつてあたり前の人の位になるよ、そして今度亦大きくなる薬を貰つて付けければ小人の勢が大きくなつてあたり前の人になつてしまふだらうよ」と云ひますのでお婆さんは大喜び

婆「それは面白いわね、夫れちや小人の寝て居る時にそつと私が付けて遣らう」と云つて其薬を貰つてしまひました。そして小人の寝て居る時はなからうかとそつと小人の家をのぞきに行きました。

こちらは兎耳の小人、そんなことは夢にも知らず今日は何時になく暖かい日和で氣も心も暢び伸びして居る上に今お晝の御飯をしまつた許りでお腹は一杯、暖かい椽側に長々と横になつて蟹の甲ら于し宜しくと云ふ見えて日向ぼこりして居りますと何時の間にか眼が催ふして來て、つい、うとくと寝てしまひました。

かしやべり婆さんは此様を見て得たり賢しと拔足さし足、ソーツと寝て居る小人に近づいて小ささ

瓶の口傾けて靈薬一滴ボタリと垂らすとコレハ
 小人の大耳は一振二振揺れると見る間に段々と小
 さくなつて今度は丁度鼠の耳の様になつてしま
 しました。之を見たお婆さんは面白くておかしく堪
 まらず、我知らず大聲を出しそうでしたので急
 で瓶のコロップ持つた手で口を押へましたから堪
 らない、お婆さんの流石の大口もくしやくと縮
 まつて丁度人形の口位になつてしまひました。

是からと云ふのはお婆さんはかしやべりでなくな
 り、小人は村中の事を聞き出さないいで世間は誠
 におたやかに暮される様になりました。

めでたし〜

